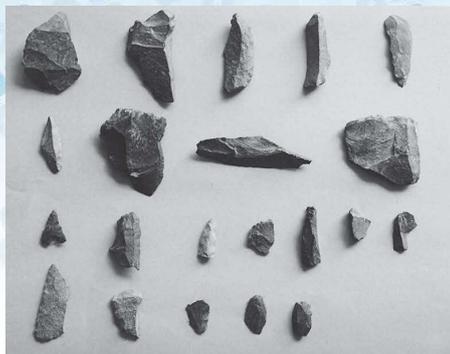


第2回 匹見の落葉広葉樹林帯と縄文遺跡群

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623



新槇原遺跡出土の石器

一般に西日本の植生は照葉樹林帯に分類されますが、標高の高い匹見には今も昔も落葉広葉樹林帯が広がっています。前者よりも後者の方が、ドングリ類など食用にできる木の実が豊富であり、それを求めて小動物が集まるなど縄文時代の人々にとって、匹見は生活しやすかったようです。

匹見の歴史は縄文時代より前の後期旧石器時代（およそ3万5千年前から1万2千年前まで）にさかのぼります。最古の遺跡は約2万年前の新槇原遺跡（道川）で、県内の同時代を代表する遺跡として、県の史跡に指定されています。

続く縄文時代（およそ1万5千年前から2400年前まで）になると遺跡数が増加します。上ノ原、神田、ヨレ、イセ（匹見）、水田ノ



石ヶ坪遺跡出土の並木・阿高式土器

上、石ヶ坪、中ノ坪（紙祖）、蔵屋敷田、田中ノ尻、上家屋（道川）、アガリ、山崎、田屋ノ原（澄川）、沖ノ原、芝（広瀬）、広戸（石谷）など場所や性格、時期などバラエティに富んでおり、縄文時代の匹見の人々の生活の様子を知る上で、大変貴重な事例となっています。

それぞれに特徴的な配石遺構があったり、出土品には広島県冠山産安山岩のほか、大分県姫島産黒曜石で作られた石器（イセ・ヨレ遺跡など）、新潟県糸魚川産の翡翠製棗玉（水田ノ上A遺跡）、九州系なみきの並木・阿高式土器（石ヶ坪遺跡）など、広い地域との交流をうかがわせるものがあったり、その見どころは多く、匹見を「西日本の縄文銀座」などと呼ぶ人もいます。